

SUNDAY NIKKEI

今を 読み解く

放送大学教授
高橋 和夫

中東は常に変化の時を生きてきた。しかし、現在進行中の変化は、これまで以上に根本的なものを予感させる。第1次世界大戦後に成立した秩序そのものの溶解が始まっているようだ。たとえば6月末にカリフ擁立を宣言した「イスラム国」が勢力範囲を広げている。この組織の主張の一つはサイクス・ピコ協定の破棄である。この協定は、第1次大戦中に英仏露で結ばれ、戦勝後にオスマン帝国のアラブ地域の領土を3国で分割すると決めた。シリアとイラクの国境線など現在の中東の国境線の多くは、英仏の都合によって引かれている。ちょうど第1次大戦の開戦の1世紀目に当たる年にイスラム国は、この英仏が基礎を作った体制に牙を向いた。

●射程の長い記述

大きな歴史の座標軸を最近の出版に求めるとすると、ユージン・ローガンの大著『アラブ500年史(上・下)』(白須英子訳、白水社・2013年)がある。多様なアラビア語資料に

溶解始まる中東の秩序

歴史探る深い思索 必要

依拠しながら、16世紀のオスマン朝によるマムルーク朝エジプトの征服から現代までを見通している。射程の長い歴史記述では山内昌之『中東国際関係史研究』(岩



波書店・13年)が注目に値する。人物の記述を通じて時代そのものを照射する手法は、この著者の得意技である。第1次大戦後に革命ソ連との交渉を担当したキヤーズイム・カラベキルというトルコ軍人の事績を追いながら、交渉過程を明るく照らし出している。

一次資料の丹念な読み込みを支えられた堅固な論証が、見上げるほどの壮大な議論を構成している。本書の学問的な到達点は目もくらむほど高い。そしてその高みに立つと眼前から驚くほど遠くまで国際関係史の風景が広がっている。この大著に取り組む読者は、厚い思索の絨毯を踏みながら壮麗な知の伽藍の中を歩むような思いに出会うだろう。

●国際世論と対比

イスラム研究者として知られる小杉であるが、その視野は広い。その視野にはイスラム圏ばかりでなく宗教性の強いアメリカをも収めている。英語文献とアラビア語文献の間を自由に往復して、アラブ・イスラム世界の感情とグローバルな世論を対比させている。本書が出版されたのは6月であり、その直後にイスラム国の拡大やパレスチナ自治区ガザでの軍事衝突が発生した。時代が、この人を求めているのだから。

イスラムを多方面から把握しようとする試みとしては内藤正典編著『イスラム世界の挫折と再生』(明石書店・14年)を最後に挙げておきたい。力作がそろっている。その中でも意識に突き刺さって来るのは、ハサン中田考の論文である。タリバンやイスラム過激派と呼ばれる人々を非難するに急であって、その声に耳を傾けようとはしてこなかったのではないか。そのような思いにさせる論考である。また「タリバン」の政治思想と組織」と題された中田の訳文・解説も当事者の声を伝えて貴重な文章が読者に切りつけてくる。血でも出ているような、鮮烈な読後感を残す。



現在の国境線の多くは、第1次大戦後に英仏の都合で引かれた
イラスト・よしおか じゅんいち